特集

糸を紡いで布を織る

―民具の復元・再現・体験―

今回の民俗資料展では、博物館に収蔵している資料を展示公開するだけでなく、はしかけグループ「中世のおんなたち」に協力していただき、古い織り機（地機）を復元製作して、実際に動きを再現する展示を行います。

昔ながらの「糸を紡いで布を織る」体験、みなさんもやってみませんか。温故知新―今のくらしを見直し、大事な何かを発見するきっかけとなるに違いありません。

資料整理の成果「琵琶湖博物館民俗資料展」

琵琶湖博物館には、県内各地から集められた昔の生活用具、数千点が収蔵されています。そのほとんどは昭和53（1978）年から平成7（1995）年の間に、県下全域に調査員を置いて県内の方から寄贈していただいて集めたものです。その調査員の数はのべ二百数十名、寄贈者の数は九百名あまり。たくさんの人々と長い年月をかけて集めた民具を、われわれ歴史資料整理室のメンバーが少しずつ整理してきました。そこで、調査員や寄贈してくださった方々への感謝の気持ちを込めて、整理した成果をみなさんに見ていただくことを目的に、3年前から「琵琶湖博物館民俗資料展」を開催しています。3回目となる今回は、糸を紡いで布を織る道具、約二百点を展示します。

今までに行った民俗資料展

糸を紡いで布を織る道具

あなたが今着ている服は、どうやってつくられたものか分かりますか。お店で買えばすむので、そんなこと考えたこともないと言われるかもしれませんね。

しかし、たった数十年前まで、自分の着る物をつくるのに麻の種まきから始める、そんなくらしが県内にも残っていました。自分で栽培した麻から繊維をとり出し、つなぎ合わせて一本の糸にし、その糸を機で織って布にし、その布を仕立てて着物をつくっていたのです。また、布を織る地機も、身近にある材木を使って、自分たちでつくっていました。

こうした「糸を紡いで布を織る」という工程はおおむね万国共通です。この工程に沿って、さまざまな収蔵資料を展示します。糸をつくる材料として、藤、麻などがあり、その材料から繊維を取り出す道具として、糸取機、綿くり機など、さらに、糸を紡ぎ機にかける準備をする道具として、苧桶、へそくり、糸車、糸枠、経台などがあり、機織り用具として、地機、高機、筬、杼などがあります。また、布を丈夫にしたり色や柄をつけるために、糸や布を染めるという工程もあり、完成した着物も展示します。

このようなたくさんの展示資料から、近江のさまざまな布づくりの様子がお分かりいただけるでしょう。

今回展示する収蔵資料の一部

学芸員　中藤　容子
（民俗学）

収蔵資料の一つ、小糸網をほどいているところ

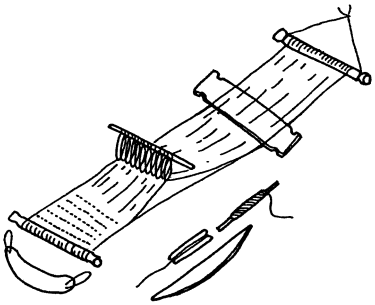
ギャラリー展示

第３回琵琶湖博物館民俗資料展

糸を紡いで布を織る

―民具の復元・再現・体験―

4月23日(金) ～ 6月10日(木)



●弥生機

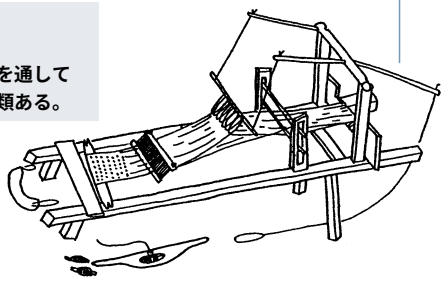
機台がなく、経糸を巻いておく経巻具（チキリともいう）を柱などにくくりつけ、織り上げた布を巻いておく布巻具（チマキともいう）を自分の腰にくくりつけて固定します。弥生時代にはこうした布つくりが行われていたようです。

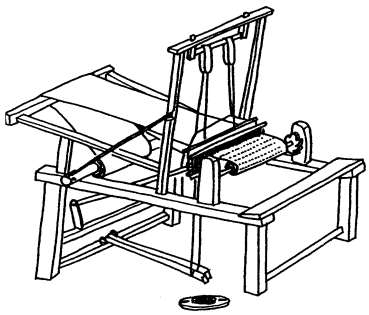
地機●

５世紀ごろから使われ始めたもので、機台に経巻具を固定し、経糸の切り替えを足で引いて行うことができることで、安定して長い布を織ることができるようになりました。

機の種類

機は、あらかじめ準備しておいた経糸（たていと）の間に緯糸（よこいと）を通して布を織る道具。歴史的にみると、大きく分けて３種類ある。





●高機

経巻具も布巻具も機台に固定し、さらに緯糸の通し方にも改良を加えることで、生産効率をあげ、後の機械織機のもとになりました。

（イラストの出典：竹内晶子「弥生の布を織る」東京大学出版会、1989）

▼弥生機を体験するはしかけさん

▲高機を体験するはしかけさん

地機を復元し再現する

―「中世のおんなたち」の活動の中で

といっても、展示室に並んでいる昔の道具をただ見るだけでは、よく分からないでしょう。その道具の働きや構造をより深く理解するためには、実際に使える状態に復元して動きを再現してみることが大切です。

琵琶湖博物館には、幸いなことに、はしかけグループ「中世のおんなたち」のメンバーがいます。彼らは、平成14年度企画展示「中世のむら―近江の暮らしのルーツを求めて―」で発足したはしかけグループ「中世探検隊」の活動の中で、帝塚山大学の澤田絹子先生から、苧績（おう）み、へそくり、地機織りなどを教わり、その後も「中世のおんなたち」として、地機織りの活動を続けています。

そこで、今回「中世のおんなたち」に協力を呼びかけたところ、博物館に収蔵している地機を参考に、自分たちの手で新たに地機をつくってみることになりました。展示室では、中世の機と並んで、製作した地機も展示し、さらに、はしかけさんが、その機を使って実際に機織りを再現します。また、展示会期中に「糸を紡いで布を織る」体験講座を開き、新たな参加者を募って、いっしょに糸・布づくりを行うことにもなりました。

高機は、現在でも伝統工芸としての近江上布などを織るのに使われています。しかし地機は、全国的に見ても使える状態のものはあまり多くありません。使える地機を見ることができ、さらに体験できる今回の展示は貴重な機会といえるでしょう。

民具を復元・再現し、体験する意義

民俗収蔵庫を埋め尽くしている数千点の昔の道具は、失われてしまった生活や生業の様子を後世に伝えるための、大切な証人です。傷みがはげしく使うことで壊れてしまう状態であっても、使い方を知る人がいなくなってしまっても、道具を復元し動きを再現することで、その仕組みや構造を解明することができます。

さらに、その道具が使われ続けていた人々のくらし、なりわいを想像してみましょう。道具の材料を手に入れ、自分で作り、それを使いこなすわざを後世に伝え維持することができた自然・社会環境とは、いったいどんなものだったのでしょう。実際に糸を紡いで布を織る体験をした人は、一枚の着物をほころびたら繕（つくろ）い、着られなくなったら仕立て直し、最後には雑巾（ぞうきん）にして使いつくしていた昔のくらしをより深く理解できることでしょう。

われわれが整理しているさまざまな民具が、昔のわざやくらしを知る手がかりになり、そこから気づいたことをこれからのくらしに役立てていく―私は、これからの学芸員生活の中で、こうした機会を少しでも多く、みなさんといっしょに作っていきたいと考えています。